私と天使と……

黒雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私と天使と……

【Ｎコード】
Ｎ８４８３Ｌ

【作者名】
黒雀

【あらすじ】
体内に取り込むと、永遠の命が得られるという『赤き魂』
それをめぐり、天使、人間、鬼の思惑が交差する！
そして争いを止めるために、天使さま走る！！

悪魔の城と家政婦さん（前書き）

どうも黒雀です。
初めて書きます。
未熟者ですが、温かく見守ってやってくだせぃ。

悪魔の城と家政婦さん

家々の電灯が消え、光源が月だけになった頃、森のほうから、悲鳴のような声が聞こえてきた。

その森は、人々が『魔境』といって近づかないところだった。

悲鳴のような声は、その『魔境』の中に聳え立つ塔から聞こえていた。

「何故だ、何故だ、何故だ何故だ何故だ！！！！！」

男が机を、ドン、と叩いた。机の上においてあった書類があたりに散らばる。男はこの塔に家政婦と二人だけで住んでいた。

「どうして『あれ』が『あれ』の中にあるんだ！？」

男が信じられないといったように、再び机を叩き始めた。

「どうすればいいんだ？どうすれば『あれ』を『あれ』に中から取り出せるんだ？」

男は不安と焦りと怒りが混ざったような表情を浮かべていた。

それから男は、三日間叫び、悩み続けた……。

男は今日も叫び、悩み続けた。

不意に部屋の扉が叩かれる音がした。

「！」

男は驚いた。この森は、『魔境』と呼ばれ、誰も近づかない所なのだ。

「奴が来た……。俺を殺しに来たんだ……！」

男は急におびえ始めた。

再び扉が叩かれた。

「あぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」

男は叫んだ。この現実から逃げたくて、この夢から逃げ出したくて。しかし逃げることができない。

正常な判断を下せなくなった男の脳は、近くにあったペンを手に取ると、勢いよく、自分の首に突き刺した。

ザーっと鮮やかな赤色をした鮮血が、辺りに飛び散る。書類にも飛び、紙を赤く染める……。

おかしい。

家政婦はパタパタとスリッパの音を廊下に響かせながら、歩いていた。

彼女の使えている主人は時間をきっちりと守る人だ。食事の時間などになると、測ったように正確に降りてくる。遅れるときも一言入れる、律儀な人だ。

それが今日は時間どうりには来なく、メッセージもない。外出するとも聞いていない。

何かあったのだろうか？

考えているうちに主人の部屋の前に着いた。一応ノックはするが返事はない。ドアノブをまわすと簡単に開いた。

「失礼します」

彼女が部屋に入ると、そこはいつもどうりの綺麗に片付いた部屋だった。

「ご主人様？ご主人様？」

そこには血の一滴も落ちていなかった……。

悪魔の城と家政婦さん（後書き）

黒雀の頭の中では、家政婦さんは美人です。

部下と老人様（前書き）

お久しぶりです。

今、『空想科学読本』シリーズにはまっています。

部下と老人様

夜中の街を、ひとつの人影が走る。
人影は、男か女かわからない中性的な性別だった。そして人影には、名前がなかった。人影はいつも、？０１０と呼ばれていた。

「『？０１０』はどこへ行ったのですか」
ポマードで髪を丁寧に撫で付け、しわのない黒のスーツで身を固めた五十歳くらいの老人が、静かに怒鳴った。
「申し訳ありません。見張りのものが少し目を放した隙に……」
部下の様な男が言った。最後のほうは消え入りそうな声だった。
「言い訳は聞きたくありません」
しばらく考えた後、老人は言った。
「？０１０の場所は、わかりますか？」
部下はしばらく考えた後
「かなり傷を負っていますし、まだこの近くに入ると思うのですが」
部下は、何故そんなことを聞くのか不思議そうな顔をしながら言った。
「なら、私が出ましょう」
老人がゆっくり立ち上がった。
！！！
「そんな！あなた様が出るような事ではありません！私どもが必ず捕まえますから！」
必死になって止めようとする部下に、老人は言った。
「でも逃がしたのはあなた達でしょう」
部下は何も言い返せない。
『それに私も退屈しているのですよ」

老人は穏やかな顔で笑った。
「さあ、行きましょう。武器を持ってきてください」
老人は目と唇を、キッ、と細めた。
「楽しい遊びの始まりです」
青い三日月が、辺りをやさしく照らす。

部下と老人様（後書き）

ホワイトシチューっておいしいですよね。
牛乳がだめな黒雀も食べられます。

三日月と天使さま（前書き）

どうも、やっとルビの振り方がわかりました。

三日月と天使さま

ドドドン！！といたる所から、耳を潰しそうな音が響いてくる。

「う～ん、どうも今日は、調子が良くないですね」

音の主はそう言いながら、手に持っていたステッキを振る。すると近くから、火柱が立ち上がる。アスファルトがドロドロと溶け出し、たくさんの家が燃えた。

しかし、家から飛び出してくる人は、一人もいない。

「いい加減出てきてはどうですか。？０１０」

音の主、ヴィクトアールは思い出したように言った。

「シャトウ君、ちゃんと人守（ヒトモリ）の結界は、張ってありますね？」

ヴィクトアールは、部下のシャトウに聞いた。

「もちろんです、ヴィクトアール様」

それを聞くと安心したように、ヴィクトアールは再びすステッキを振り出した。

ステッキを振ること数十分、近くの草むらが動いた。

「そこですか！」

ヴィクトアールが振り向くとそこから火柱が上がった。

すると、上から風を切る音が聞こえた。

「脳天がら空き！！」

上から、長刀を持った少年が、ヴィクトアールの頭上をめがけて落ちてきた。

ギン！

長刀とステッキが交わり、火花を散らす。

「やっと出てきましたね、？０１０！」

？０１０の刀が、ヴィクトアールをめがけて振り下ろされる。

「あんまりうるせぇから、出てきてやったぜ！ジジイ」

ヴィクトアールが避け、刀は空を切る。刀の先が、地面に刺さる。

「おとなしく捕まってくれませんか？」

ステッキが？０１０の腹に振り下ろされる。

「やだね、クソジジイ！」

刺さった刀を軸に、飛んで避ける。

「残念です、交渉決裂」

?０１０は飛んだままカカトを振り下ろす。

「ぜんぜん、残念そうな顔してねーぜ」

三日月と天使さま（後書き）

お疲れ様って言って

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8483l/

私と天使と……

2010年10月19日07時48分発行